

〈島〉と〈異界〉

菅田正昭

古来、この弧状列島における〈異界〉は、水平的感覚の延長線上、「海の彼方の常世の島」として想定されることが多かった。その異境からやって来るマレピトたち、〈鬼ヶ島〉とみなされた島々、異界のさらに先にある別の異界までをも見通しながら、島存在の本質を考察する。

海上の遙か彼方に存在していた〈異界〉

異界・他界・異境―これらの言葉は、ほとんど同義語として用いられている。民俗学では「他界観」という形で使われる。『広辞苑』で「他界」を引くと、「①他の世界。別の世界。②「人間界を去って他の世界へ行く意」死ぬこと。特に、貴人の死去をいう。」とある。しかし、『広辞苑』にはなぜか「異界」の項目がない。ちなみに、「異境」は

「故国や郷里から遠く離れた土地。他郷。他国。異域。」と出てくる。

ところが、最近の傾向としては、「他界」よりも「異界」のほうが多く使われているようだ。それというのも、「他界観」の「他界」の場合、〈死後の霊魂が行く世界〉という概念が強く、〈現世〉たいする〈他界〉というイメージが付きまよってくるからである。すなわち、『広辞苑』の「他界」では②の義、つまり〈あの世〉である。もちろん、当然のことながら、①の義もある。

現在、民俗学と文化人類学の区別がつきにくくなってきているが、それもあってか、民俗学的な「他界」より文化人類学的な「異界」の語のほうが好まれる傾向がある。なぜなら、〈異界〉の場合だと、〈現世〉に対する〈他界〉よりも、概念的な広がりがあるからである。すなわち、異界U他界である。異界の中に他界が含まれてしまうのである。つまり、〈異界〉は、〈自分たちが住んでいる世界の外側にある世界〉のすべてを含んでしまう概念であるといえよう。否、それどころか、〈外側〉だけでなく、自分の身の周りに突然開いた異次元空間や、アニメに象徴されるバーチャルな世界をも含む語となってきた。

〈異界・他界・異境〉という概念の原形は、折口信夫によれば、「妣が国」である（折口「妣が国・常世へ―異境意識の起伏」「古代研究（民俗学篇Ⅰ）全集第二巻など）。この「妣が国」という詩想溢れる概念は折口独特のものだが、語自体はスサノヲが亡き母イザナミ恋しさに「僕は妣（の）国に往なむとおもひて哭」いたこと（『古事記』誓約の段）に由来する。あるいは、神武東征のとき、稲飯命と三毛入野命という神武天皇の二人の兄の乗っていた船が暴風に遭遇して難破しそうになり、前者が「吾が祖は天神、母は海神なり」とのたまつて海に入り、後者が「我が母及び姨は、並是海神なり」ともうされて浪の秀を踏んで海中の常世郷に往つた（『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年六月条）という記事に基づ

いている。

折口は、その「妣が国」から記紀神話に登場する「根（之）堅洲国」「黄泉国」「綿津見神之宮」「常世」などが分化したものと捉えている。折口の場合、母を思慕するスサノヲや、イナヒ、ミケイリノへの感情移入のため、「妣が国」には「死者の国」のイメージが付きまるとしているが、折口自身は水平思考の持ち主である。実は、これらの異界は本来、海上の遙か彼方にあつた、すなわち、水平思考的に考えられていたのである。

ところが、ネノカタス国と同義の「根国」（紀）は、『延喜式』祝詞の「道饗祭」の祝詞に「根国底国より龕び疎び来む物に…」とあるように、イメージ的には悪鬼邪霊が潜んでいる地へと転化していく。すなわち、「底」の字に引きずられて、地下の国・地底の国と想われてしまう。それにともない、『日本書紀』いうところの「凶目汚穢き国」である黄泉国も「鬼」（『記』の八くさの雷神は「紀」一書では鬼として描かれている）が住んでいることから地下の「死者の国」化してしまう。いいかえれば、水平的に認識されていた異界が垂直的に下向してしまうのである。

同様のことは「龍宮城」の原像でもある「わたつみの宮」についてもいえる。「問なし勝間の小船」に乗って山幸彦（火遠理命）彦火火出見命が渡り、海神の娘の豊玉姫と三年間過ごした「わたつみの宮」は、『古事記』によれば、明

らかに海の中にあつた（常世）として描かれている。すなわち、「綿津見神之宮」は垂直思考の海面下にあつたことになる。

しかし、『丹後国風土記』逸文の「水江の浦の嶋子」（いわゆる浦島太郎）が渡つたトコヨ（蓬山＝仙都）は、「海中博大之嶋」（海中の博く大きな島）にあつた。この「海中」を、ワタナカ、ウミナカ（あるいは「うみのなか」）、カイチュウとよんでしまうのかで、イメージが大きく変わってしまう。だが、この場合の「嶋」という存在が、「浦嶋子」のトコヨが水平的なものであつたことを示してくれる。すなわち、いわゆる龍宮城は海面下の桃源郷ではなく、その原型は海の彼方の常世の島にあつたわけである。

「妣が国」の原像だつた常世

話が後先になるが、「根国底国」にも水平思考の残像があつた。すなわち、『延喜式』祝詞の、いわゆる大祓詞には「…荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に坐す速開都比咩と云ふ神、持ち可か吞みてむ。如此可か吞みてば、氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神、根国底之國に氣吹き放ちてむ。如此氣吹き放ちてば、根国底之國に坐す速佐須良比咩と云ふ神、持ち佐須良比失ひてむ…」とあり、諸々の罪・穢れは最終的には水平線の遙か彼方の根国底国の女神ハヤ

サスラ姫が浄化してくれるのである。まさに、（妣が国へ・常世へ）なのである。

天と海との茫漠たる、一見、空だか海だか判別しにくい境目に、何か（影）のようなものを感じることができれば、その辺りが常世である。その影は島かもしれないし、大陸かもしれないし、極端にいえば、蜃気楼や幻覚であつてもいい。ちなみに、この常世は『古事記』によれば、「時じくの香の木の実」（常時香しい柑橘類の木の実）が生つている世界（理想郷）として認識されていた。ウツナー（沖繩）のニライカナイ（ニルカカナヤ）も「根国」と同じN音系であり、海上の彼方にある異界の古形をとどめている。

その常世が海面下に没したのが「わたつみの宮」であり「龍宮（城）」である。その同じアマの音韻を持つ海の中の常世が、もう一つのアマである天へ向つて垂直的に上昇し成立したのが高天原である。その意味では、常世がほんとうの「妣が国」の原像であるといえよう。

「異界」からの来訪神の原型をとどめる神々

この常世に象徴されるように、水平的感覚の異界は、わが弧状列島に住む古代人たちは渡ることができると思われていた。すなわち、現実の世界と交通可能な空間と考えられていたのである。神々の世界である高天原や、死者の国

である黄泉国との間の「通り路」も、まだ閉ざされてはいなかったのである。高天原の神々は我々の祖霊が浄化された存在、黄泉国の住人はまだその境地に達していない死者の霊と考えると、常世というのほもちろん祖先の霊たちが住んでいる場所だった。

折口信夫によると、こうした異界から時を定めてやって来るのがマレビト（神および人）である。稀に訪れる人の意である。普通の人から見ると、彼岸（あの世）と此岸（この世）の両面性を持つ異界の住人であるマレビトも、二つの側面を持つことになる。すなわち、日常生活から隔絶された存在がマレビトである。

文化人類学では「民族・地域・階層・文化などについて、異なる複数の集団の境界にあって、いずれの集団にも十分帰属していない人々。境界人」（広辞苑）のことを「マージナル・マン（marginal man）」とよんでいるが、まさにマレビトはマージナル（「ふちの、へりの」義）な存在であった。普通の人が超えることができない（境界）を、自由に越えて往来できたからである。かつて、お正月に家々を廻っては厄除けと招福のため獅子舞や神楽などの雑芸を披露した遊芸者がいたが、彼らもマージナルなマレビトと想われていたのである。

マレビトは人であると同時に神でもあったが、マレビト神の典型が民俗学でいう「春来る鬼」である。秋田のナマ

ハゲや、節分の夜、全国各地に出現する「鬼」や、甕島のトシドンなどがそうである。いずれも大晦日（旧暦・新暦の場合も）とか、小正月（これも旧暦・新暦の両方がある）の前夜などに出現する。節分も明けるとその翌日は立春だが、年賀状に「迎春」「新春」「初春」などと記すように、実は、正月＝春である。その「年越し」の日の夜やって来るのがナマハゲや、鬼や、トシドンなのである。

この場合の「鬼」とは先祖霊の化身であり、新しい年の靈魂（年魂＝年玉）も持って（常世）から訪れる。昔（昭和二四年まで）は数え歳といつて、お正月になると皆が平等に一つ年齢を重ねる慣習があったが、その年を持つてくるのが祖霊である年神だった。親（年神の代理）が子どもに「お年玉」を授けるのも、ここに由来する。そして、この場合のトシは穀物霊も意味した。すなわち、年がら年中、豊作である常世の豊穰を与えるのである。ちなみに、カミ（神・幽）である祖霊はふつう目には視えないが、オニ（三）は隠れて姿が視えないという意味の隠（三）が和語化するとき語尾の三が付いたものである。

トカラ列島の悪石島の旧盆（旧暦七月一六日）の盆踊りのとき登場する異形の仮面神ボゼにも、祖霊神としてのマレビトの貌がほの見えてくる。諺に「盆と正月が一度に来たような」とか「盆には地獄の釜も開く」といわれるように、正月と盆には祖霊がやって来るのである。その意味で、

ボゼはまさに祖霊神なのである。

その出立ちたるや、ピロウ樹の葉の腰巻をまとい、あたかもニューギニアのジャングルから抜け出てきたような貌をしている。まさにアウストロネシア系の、海の遙か彼方の異界からの来訪神なのである。その手には男性器の直喙であるマラ棒を持っているが、女性はそれに触られると妊娠するといわれて逃げ回る。すなわち、子孫繁栄と豊穡を約束するニライカナイからの使者（祖霊）なのである。

なぜ、祖霊がそうした装いをしているかといえ、異次元から現世に来るときカミとして目に視えるような姿・形をしなければ子孫たちにわからないからである。鬼も含めてマレピトの異形性は、ここから発する。ある意味では、その異形性が畏怖の対象になるわけだが、鬼の場合、そこから零落化していくわけである。悪石島のボゼの場合、異界から寄り来る異形の来訪神の原型をとどめているといえるよう。

——じつは豊穡な常世だった(鬼ヶ島)

日常的に(海)を感じることもなく本土(国地)で生活している人びとにとって、海上遙か彼方の地は悪鬼邪鬼の潜む他界・異界でしかなかった。平家打倒の鹿ヶ谷の陰謀に加担したとされる俊寛(一一四三〜七九)が流されたとい

う「鬼界ヶ島」は、まさにその名のとおり(他界)(異界)としての「鬼界」の島の義である。俊寛僧都は生きながらにして「鬼籍」に入れられてしまったのである。都の人たちにとっては、鬼界ヶ島はトカラの硫黄島(三島村)であろうと、奄美の喜界島(喜界町)や、伊王島(長崎市)であろうと、遠く離れた(異界)と感ぜられる海に浮かぶ島なら、どこでもよかつたのである。

そうした空間感覚が固定化したのが(鬼ヶ島)である。鬼ヶ島という名辞だけで、蔑視の対象へと転化してしまうのである。たとえ、もう一〇年以上も前のことである。いつもなら人権を声高に主張する硬派の、わたしとはまったく同世代の評論家がTVの深夜のトーク番組に出演して、ちよつと酔つたような口調で論敵らしき人に、何の内容だったか思い出せないが、「あんたの考えは古いぞ。今は鬼ヶ島へ島流しされるような時代じゃあないんだ」と口走つたのである。彼の認識では、流刑地は鬼ヶ島であらねばならないのである。

しかし、鬼ヶ島は柳田一折口流にいえば、常世の島が零落化したものである。そこには住人の異形性と、島の豊穡性の残滓が見られるのである。すなわち、桃太郎が征伐した鬼ヶ島の宝物である。おそらく、「京なめり」のような雅やかな言葉ではなく、強い潮風の中でも聞こえる言語を話していたのであろう。島びとの装いも、いわゆる粗野だ

ったのであろう。それだけでも充分に異形性を想像させてしまうのだ。

「鬼ヶ島」の異名を持つ島は多いが、『保元物語（古活字本）』（岩波・日本古典文学大系「保元物語・平治物語」）には、為朝が渡ったという「鬼が嶋」のことが出てくる。「八丈嶋」の「わきしま」とあるので、ふつう、伊豆諸島最南端の青ヶ島に擬せられているが、真偽のほどは定かではない。その住人は鬼の子孫なのに最早、鬼としての能力が失せて「かたちも人になりて」という状態になっている。すなわち、鬼からの零落化である。

為朝が「鬼が嶋」へ渡ったとき、「あみのごとくなる太布」を身に着けていたが、すでに鬼としての「果報」は尽きていた。それは「鬼神」としての「たから」を失っていたからである。それは「かくれみの・かくれがさ・うかがひぐつ・しづみぐつ・劔などいふ宝」だった。

鬼神であったころは、これらの神宝を使って《日々人を食っていた》が、それがいつの間にか失ってしまうと、「他国へ行くこともかなわず」、いわゆる人間のかたちになっってしまったのである。鬼が人間を食うというのは仏教の地獄思想の反映だが、異形なるマレピトが差別の裏返しとして民衆から怖れられていたことは事実である。その代わり、「鬼が嶋」の場合、人間に成り果てた鬼神の末裔は人ではなく鳥を捕らえて食べたのである。

作家・有吉佐和子（一九三二～八四）が小説『海暗』を發表したのは昭和四三年のことだが、その舞台となった御蔵島^{しんざ}では今でもカツオドリが多く生息するが、その時代はもっと多かった。そして青ヶ島でも結構いたのである。しかも、天明の大噴火（山焼け）以前は、アホウドリもかなりいたのである。カツオドリは八丈系の人が多い沖繩の大東島ではドンゴドリと呼ばれており、アホウやドンゴを冠する海鳥^{うみどり}はどちらも捕獲するには簡単である。鳥島沖で遭難したジョン万次郎（一八二七～九八）が、漂着一四三日目に米国の捕鯨船に救助されるまで、生きながらえることができたのもアホウドリが生息していたからである。その意味では、為朝が渡った「鬼が嶋」は、「たから」を消失したとはいえ、食糧豊富な常世の島であった。

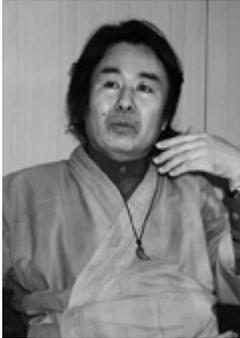
―― 異界の島のさらに向こうにある（異界）

もちろん、こうした異界の島の外側にも〈異界〉が存在していた。カミは海に向こうからやって来るのである。たとえば、御蔵島より北の北部伊豆諸島にはヒイミサマ（日忌様）・カンナンボーシ（海難法師）系統のタブーがある。一月二四日の晩から二五日にかけて島びとが戸を固く閉ざして外出せず、家でひっそりともっている、という行事である。新島ではカンナンボーシ、利島でもカンナンボー

シ、あるいはヤダイジ、神津島では二十五日様、三宅島ではカンナンポーシ、忌の日、大島ではヒイミサマとよばれている。

本来、海の方から訪れる神をまつるため物忌みしていたと考えられるが、その趣旨が忘れられていくうちに、カンナンポーシという音韻に引きずられて、海で遭難した人の霊が上陸してくるので、それを怖れて家で引き籠っている、というふうに思われるようになった。すなわち、マレビトが零落して遭難者の霊が妖怪化してしまったのである。しかし、昔は、二四日の晩は外出禁止という新島では、止むを得ず外出する場合、被り物や髪にトベラ（芳香性のある常緑の小高木）の枝を挿したという。新島におけるこの習俗は一種の「除け」になっているが、本来、こうしたカザシ（挿頭）モノは神を憑り付かせるための神籠ひもろぎである。じ

すがたまさあき
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本的靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらぼん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。

つは、普通の人にはタブー（禁忌）とされる外出は、神人がマレビト神を祭るためのものであったのである。

柳田國男は伊豆諸島におけるこの系統の祭りについて『日本の祭』（定本柳田國男集「第一〇刊」）の中で、次のように述べている。

「伊豆七島の正月二十四日、忌の日とも日忌様ともいふ祭には、赤い帆を掛けた神の船が海を渡ってくる、それを見たものは死ぬとまで傳へて居た」（祭から祭禮へ）

「：伊豆七島の忌の日又は日忌様は、この方は十一月で無く正月の二十四日になって居るが、やはりこの夜を以て尊神の来臨を傳へ、色々の物忌を守つて御祭に奉仕して居る。大島新島では悪代官の亡霊、又は海難坊といふ妖魔の怖れに変形しか、つて居るが、もつと先の方の御蔵島などに行くと、赤い帆の船が海を渡つて来るのを、出て見た者は死

ぬなどと、畏れて居るのだから、やはり慎むべき精進の日であつた。」(「物忌と精進」)

ちなみに、東京大学学生自治会議長のとき東大ポポロ事件(昭和二七年二月二七日)などで退学処分となり、のち日本平和委員会などを経て、やがて、ベ平連の事務局長となつた吉川勇一氏は、学生時代、柳田國男を訪問したことがきっかけとなつて、神津島へ派遣され、カンナンボーシの調査にあつている。

ここで注目しなければならないのが、伊豆諸島南部の八丈島や青ヶ島には、このカンナンボーシの信仰がないが、旧暦の正月と七月の、それぞれ二三日と二六日の夜、サンヤサマ(三夜様)とロクヤサマ(六夜様)が行われていることである。本土の二三日夜の月待ち講のバリエーションと思われがちだが、どこかでカンナンボーシとつながっているように思えるのである。とくに、青ヶ島ではサンヤサマは大里神社、ロクヤサマは東台所神社で行われているが、

ロクヤサマはその月の最後の月の出で、次に三日月が出るまでの五〜六日間は、月は見られないのである。その月齢二六日の月が海面に現れるとき、まさに黄金のゴンドラなのである。柳田的にいえば「赤い帆の船」なのである。そこには、おそらく常世の神が乗っていたはずである。

帆掛け舟といえば、屋久島には「先島丸」の民俗がある。宮之浦の墓地へ行くと、なまや霊屋(墓)の壁に、子どもたちが描いた帆掛け舟(汽船の場合もある)の絵や、船の模型が奉納されている。おそらく、この「先島丸」は、民俗学的に見れば、お盆の精霊船の変形だが、尾久島では先祖の御霊が乗った船は南の沖繩の先島ではなく、甌島へと向うといわれている。下野敏見編『日本民話25 屋久島篇』には、この「先島丸」の民話が収録されている。異界に浮かぶ「常世の島」の向こうにも、もちろん、祖霊たちが往き来する異界があるわけである。シマのサキ(崎)のミタマが行くサキ(先)の島の義である。 ■